『源氏物語』の語彙の研究
――会話文の漢語使用を視点として――

横松夏実

はじめに

日本語は外来語である漢語を受容して言語生活を豊かにしてきた。平安時代の女性は、未だ漢語の受容を控えるという忌避の環境に身を置いていた。平安時代の創作作品としての『源氏物語』には当時の漢語使用の実態が、作者紫式部によって描かれている。[注1] 紫式部は博士家出身という経歴を持ち、十分に漢文漢語の世界を修得理解している人ではあるが、彼女の作品には登場人物ごとに漢語をどう表現しているのであろうか。『源氏物語』の登場人物の口頭会話に当時の言語生活の特徴が顕著に表れているものとの見通しで、会話文の漢語使用を検証する。発話者の男女差や社会的階級差などの位相差から分析し、当時の漢語使用の実態を分析する。作者が当時の社会での、漢語の受容の様相をどう活写しているか。王朝時代の日本語の実体を漢語を通して探っていく。

本稿では分析資料[注2]の会話部から漢語を抜き出し、用例を採録していく。会話文の認定については、会話文と認定された「　」部分を扱うこととした。ただし文脈から話し手が登場人物によらない、物語に引用しているという意味で付された「　」と判断したものについては分析対象から除外した。また、採録した用例を次のように分類した。

A男性→男性　B男性→女性　C女性→女性　D女性→男性

漢語の認定基準は和語・漢語を識別した『新潮国語辞典　第二版』[注3]を用いた。その上で、本稿における漢語認定については左記のような方法を取った。

①漢語で表記される人名・役職名は漢語に含む。

②中国語にとっては外来語であるが、日本語にとっては中国語として摂取された語、梵字などの語は漢語に含む。

③漢語が和語と複合した語は、構成要素に漢語が含まれている

ため漢語に含む。

【例】奏す　艶なり　御覧ず

④接頭辞が付く漢語は、接頭辞を含めずに採録する。（「御覧ず」など密接に関連しているものは接頭辞を含む。）

【例】御消息　御宿世　前斎院　御覧ず

⑤二通りの読み方があるものは、分析資料においてふりがなの指示に従うものとする。ふりがなのないものは漢語に含めず、調査の対象から除外する。

一、源氏物語に見られる漢語使用と性差

採録した漢語をA、B、C、Dに分類し、各巻一例ずつあげる。

A男性→男性

桐壺　4例　国の親となりて、帝王の上なきくらいにのぼるべき相おはします人の　（三一－九）

帚木　56例　難なくしいづることなむ、なほまことのものの上手は、さまことに見えわかれはべる。　（六〇－六）

空蝉　56例　心にしも従はず苦しきを、さりぬべきをり見て、対面すべくたばかれ　（一〇六－七）

夕顔　25例　懸想人のいとものげなき足もとを見つけられてはべらむ時、からくもあるべきかな　（一三六－一一）

若紫　35例　深き里はひとばなれ心すごく、若き妻子の思ひわびぬべきにより、かとは心をやれる　（一八六－十二）

末摘花1例　かやうの御ありきには、随身からこそはかばかしきこともあるべけれ　（二五二－一）

紅葉賀1例　さるは、すきずきしううち乱れて、この見ゆる女房にまれ、またこなたかなたの人々など、なべてならずとも見え聞こえざめるを、いかなるもののくまに隠れありきて、かく人にも怨みらるらむ　（三三－五）

花宴　14例　ただ今、北の陣より、かねてより隠れ立ちてはべりつる車どもまかり出づる。　（五五－十二）

葵　8例　院にも、ありさま奏しはべらむに、おしはからせたまひてむ　（一〇八－一〇）

賢木　8例　春宮の御ゆかり、いとほしう思ひたまへられはべりて　（一六六－四）

須磨　2例　聞こゆべきことなむ。あからさまに対面もがな　（二四七－八）

明石　17例　ただこの人の高き本意かなへたまへとなむ念じはべる。　（二七九－一一）

澪標　2例　内大臣の御願果たしに詣でたまふを、知らぬ人もありけり　（三三－四）

蓬生　3例　かかるついでに入りて消息せよ　（七三－二）
絵合　14例　あながちに隠して、心やすくも御覧ぜさせず、なやましきこゆる、いとめざましや　（一〇〇－一三）
松風　8例　修理などして、かたのごと人住みぬべくはつくろひなされなむや　（一二一－一）
薄雲　7例　いと奏しがたく、かへりては罪にもやまかりあたらむと思ひたまへ憚ること多かれど　（一七〇－九）
朝顔　2例　錠のいといたく銹びにければ、あかず　（二〇〇－一二）
少女　7例　はなはだ非常なり　（二二四－一〇）
玉鬘　3例　なほいとたいだいしく、あたらしきことなり。故少弐ののたまひしこともあり。　（二八八－九）
常夏　8例　かやうのことこそ、人のため、おのづから家損なるわざにはべりけれ　（八七－一）
野分　5例　人柄あやしうはなやかに、男々しきかたによりて、親などの御孝をも、いかめしきさまをばたてて、人にも見おどろかさむの心あり、まことにしみて深きところはなき人になむものせられける。　（一三一－九）
行幸　10例　昔より、公私のことにつけて、心の隔てなく、大小のこと聞こえうけたまはり、羽を並ぶるやうにて、朝廷の御後身をもつかうまつるとなむ思うたまへしを、末の世となりて、そのかみ思うたまへし本意なきやうなること、うち交じりはべれど、うちうちの私事に　（一六四－三）
藤袴　3例　されど、大原野の行幸に、上を見たてまつりたまひては、いとめでたくおはしけりと思ひたまへりき。　（一三一－九）
真木柱5例　ともかくも。もとより進退ならぬ人の御ことなれば　（二四〇－四）
梅枝　4例　宮仕えの筋は、あまたあるなかに、すこしのけぢめをいどまむこそ本意ならめ。　（二六三－一四）
藤裏葉6例　直衣こそあまり濃くて軽びためれ。非参議のほど、何となき若人こそ、二藍はよけれ。　（二八三－一一）
若紫上38例　さきざき人の上に見聞きしにも、女は心よりほかに、あはあはしく、人におとしめらるる宿世あるなむ、いとくちをしく悲しき　（一四－一）
若紫下37例　月ごろは、いろいろの病者を見あつかひ、心の暇なきほどに、院の御賀のため、ここにものしたまふ皇女の、法事つかうまつりたまふべくありしを、次々とどこほることしげくて　（二五三－一三）
柏木　16例　日ごろもかくなむのたまへど、邪気などの、人の心

たぶろかして、かかるかたにて進むるやうもはべるをとて、聞き入れはべらぬなり　（二八三－二）
横笛　18例　あならうがはしや。いと不便なり。かれ取り隠せ。（三二三－一二）
鈴虫　5例　明け暮れ見たてまつり聞こえうけたまはらむことおこたらむに、本意違いぬべし。（三五〇－五）
夕霧　9例　かの御子こそは、ここにものしたまふ入道の宮よりさしつぎには、らうたしたまひけれ。（六九－七）
御法　7例　御加持にさぶらふ大徳たち、読経の僧なども、皆声やめて出でぬなるを、さりとも、立ちとまりてものすべきもあらむ。（一一四－七）
幻　7例　かの心ざしおかれたる極楽の曼荼羅など、このたびなむ供養ずべき。（一四五－一〇）

B男性→女性

桐壺　11例　故大納言の遺言あやまたず、宮仕への本意深くものたりしよろこびは　（二六－一四）
帚木　2例　つらきこともありとも、念じてなのめに思ひなりて、かかる心だに失せなれば　（六三－一二）
空蝉　1例　この格子はおろされたる　（一〇七－四）
夕顔　4例　心のままにとぶらひまうづることはなけれど、なほ久しう対面せぬ時は　（一二四－一三）
若紫　10例　いで御消息聞こえむ　（一九九－一〇）
末摘花3例　うとからず思ひむつびたまはむこそ、本意あるこちすべけれ　（二七二－五）
紅葉賀6例　今日の試楽は、青海波の事みな尽きぬな。いかが見たまひつる　（十二－七）
花宴　1例　ことわりや。聞こえ違へたる文字かな　（五三－十四）
葵　8例　月ごろはいとど涙に霧りふたがりて、色あひなく御覧ぜられはべらむと思ひたまふれど　（一二一－一二）
賢木　9例　世にけがれたりともおぼし捨つまじきを頼みにて、かく本意のごとくたてまつりながら　（一八七－七）
須磨　6例　吾子の御宿世にて、おぼえぬことのあるなり。（二四八－一）
明石　2例　なほ源氏の君、まことに犯しなきにてかく沈むならば、かならずこの報いありとなむおぼえはべる。（二八六－八）
澪標　11例　みづからもおぼえぬ住ひに結ぼほれたりし例を思ひよそへて、しばし念じたまへ　（十九－八）
蓬生　6例　侍従の君と聞こえし人に、対面賜はらむ

（七四－三）

絵合　2例　かの浦々の巻は、中宮にさぶらはせたまへ
（一一四－二）

松風　8例　修理などして、かたのごと人住みぬべくはつくろひなされなむや
（一二一－一）

薄雲　7例　前裁どもこそ残りなくひもときはべりにけれ
（一七九－四）

朝顔　4例　前斎院の御心ばへは、またさまことにぞ見ゆる
（二一〇－一〇）

少女　23例　学問などして、すこしものの心得はべらば、その恨みはおのづから解けはべりなむ
（二二三－七）

玉鬘　17例　昔の懸想のをかしきいどみには、あだ人といふ五文字を、やすめどころにうち置きて、言の葉の続きたよりあるこちすべかめり
（三二八－一）

初音　7例　あやしく有職ども生い出づるころほひにこそあれ。
（二七－六）

胡蝶　6例　すきずきしうあざれがましき今やうの人の、便ないことし出でなどする、男の咎にしもあらぬことなり。
（四三－二）

螢　11例　容貌などはすぐれねど、用意けしきなど、よしあり、愛敬づきたる君なり。
（七〇－九）

常夏　23例　いとかけり来まほしげに思へるを、中将の、いと実法の人にて率て来ぬ、無心なめりかし。
（八九－一）

野分　10例　いと不調なる女まうけはべりて、もてわづらひはべりぬ
（一四四－九）

行幸　23例　もの言ひただならぬ女房などもこそ、耳とどむれ
（一七七－四）

藤袴　7例　これも御覧ずべきゆゑはありけり
（一八七－一一）

真木柱9例　まことにおぼしおきつることにやあらむ、しばし勘事したまふべきにたあらむ
（二一二－十二）

梅枝　8例　大臣の、口入れたまひしに執念かりきとて、引き違えたまふなるべし。
（二七五－一）

藤裏葉5例　のぞきて見たまへ。いと警策にねびきまさる人なり。
（二八四－八）

若紫上45例　みづからの心より離れてあるべきにもあらぬを、思う心よりほかに人にも見え、宿世のほど定められむなむ、いと軽々しく、身のもてなしありさまおしはからるることなるを、あやしくものはかなき心ざまにやと見ゆめる御さまなるを、これかれの心にまかせてもてなしきこゆな。
（二七－八）

若紫下52例　月たたば、御いそぎ近く、もの騒がしからむに、掻

き合わせたまはむ御琴の音も、試楽めきて人言ひなさむを、このころ静かなるほどにこころみたまへ　（一六九－一〇）

柏木　10例　かくても、たひらかにて、同じうは念誦をもつとめたまへ　（二八五－九）

横笛　3例　好き好きしさを、さまざまにひき出でても御覧ぜられぬるかな。　（三二九－八）

鈴虫　6例　秋の虫の声いづれとなきなかに、松虫なむすぐれたるとて、中宮の、はるけき野辺を分けて、いとわざと尋ね取りつつ放たせたまへる、しるく鳴き伝ふることこそ少なかなれ。　（三五二－一三）

夕霧　36例　本妻強くものしたまふ。さる、ときにあへる族類にて、いとやむごとなし。　（三一－一三）

御法　1例　今宵は巣離れたるここちして、無徳なりや。まかりてやすみはべらむ　（一〇八－七）

幻　6例　故后の宮のかくれたまへりし春なむ、花の色を見ても、まことに心あらばとおぼえし。　（一四〇－八）

恐ろし　（八七－六）

空蝉　1例　待ちたまへや。そこは持にこそあらめ。　（一〇八－一二）

夕顔　2例　中将殿こそ、これよりわたりたまひぬれ　（一三四－一二）

若紫　2例　上こそ、この寺にありし源氏の君こそおはしたなれ　（二一九－五）

末摘花4例　答へきこえで、ただ聞けとあらば、格子など鎖してはありなむ　（二五九－一〇）

葵　4例　おほよそ人だに、今日の物見には、大将殿をこそは、あやしき山がつさへ見たてまつらむとすなれ。　（六九－五）

澪標　1例　人づてには、いと便なきこと　（四五－五）

蓬生　10例　この受領どもの、おもしろき家造りこのむが、この宮の木立を心につけて、　（五七－一〇）

絵合　1例　近衛の大君の心高さは、げに捨てがたけれど、在五中将の名をば、え朽さじ　（一〇五－一一）

薄雲　4例　今ひときざみなり劣りたまひて、更衣腹と言はれたまひしけぢめにこそおはす　（一五一－一〇）

少女　7例　殿のおぼしのたまふことはさらにも聞こえず、大納言殿にもいかに聞かせたまはむ　（二五三－一三）

C女性→女性

桐壺　3例　典侍の奏したまひしを　（二〇－一二）

帚木　1例　中将の君はいづくにぞ。人気遠きここちして、もの

玉鬘　12例　右近が、数にもはべらず、いかでか御覧じつけられむと思うたまへしだに、仏神の御導きはべらざりけりや　（三一六－七）

常夏　4例　草の文字はえ見知らねばにやあらむ、本末なくも見ゆるかな　（一一〇－三）

若紫上16例　をかしやかにて帰したてまつらむに、いと便なうはべらむ　（七〇－一一）

若紫下4例　昨日のものはいかがさせたまひてし。今朝、院の御覧じつる文の色こそ、似てはべりつれ　（二三一－三）

夕霧　15例　後かならずしも、対面のはべるべきにもはべらざめり。　（三六－一三）

D女性→男性

帚木　3例　まのあたりならずとも、さるべからむ雑事等はうけたまはらむ　（七七－六）

空蟬　3例　若君はいづくにおはしますならむ。この御格子はさしてなむ　（一一〇－一〇）

夕顔　6例　ただかく御前にさぶらひ御覧ぜらるることの変りはべりなむことを　（一二三－八）

若紫　1例　何の面目にてか、また都にも帰らむ　（一八六－八）

末摘花3例　琴をぞあつかしき語らひ人と思へる　（二四七－二）

紅葉賀1例　儺やたふとて、犬君がこれをこばちなべりにければ、つくろひはべるぞ　（二〇－八）

葵　4例　さばかりにては、さな言はせそ。大将殿をぞ豪家には思ひきこゆらむ　（七〇－九）

賢木　1例　さはあらで、髪はそれよりも短くて、黒き衣などを着て、夜居の僧のやうになりはべらむとすれば、見たてまつらむこともいとど久しかるべきぞ　（一五七－七）

須磨　2例　朝廷の勘事なる人は、心に任せてこの世のあぢはひをだに知ること難うこそあなれ。　（二四四－七）

明石　1例　罪におぢて都を去りし人を、三年をだに過ぐさず許されむことは、世の人もいかが言ひ伝えはべらむ　（二八六－十二）

澪標　2例　いとほしかるべけれど、かの御遺言をかこちて知らず顔に参らせたまてまつりたまへかし　（十二－十）

薄雲　2例　院の御遺言にかなひて、内裏の御後見つかうまつりたまふこと、年ごろ思ひ知りはべること多かれど、何かにつけては、その心寄せことなるさまをも漏らしきこえむとのみ　（一六七－三）

朝顔　2例　院の上かくれたまひてのち、よろづ心細くおぼえは

べりつるに　（一九〇－三）

少女　11例　この家にさる筋の人出でものしたまはで止むやうあらじと、故大臣の思ひたまひて　（二三四－一二）

玉鬘　3例　かくのたまふを、いと幸ひありと思ひたまふるを、宿世つたなき人にやはべらむ、思ひ憚ることはべりて、いかでか人に御覧ぜられむと、人知れず嘆きはべるめれば、心苦しう見たまへわずらひぬる　（二九〇－七）

初音　3例　醍醐の阿闍梨の君の御あつかひしはべるとて、衣どももえ縫ひはべらでなむ。　（二二一－三）

胡蝶　4例　さらに人の御消息などは聞こえ伝ふることはべらず。　（四四－一〇）

螢　1例　宇津保の藤原君の女こそ、いと重りかにはかばかしき人にて、あやまちなかめれど、すくよかに言ひ出でたるしわざも、女しきところなかめるぞ、ひとやうなめる　（七八－一）

常夏　4例　妙法寺の別当大徳の、産屋にはべりける、あえものとなむ嘆きはべりたうびし。　（一〇五－二）

野分　1例　交野の少将は、紙の色にこそととのへはべりけれ　（一四二－四）

行幸　4例　出で立ちいそぎをなむ、思ひもよほされはべるに、この中将の、いとあはれにあやしきまで思ひあつかひ、心を騒がいたまふ、見はべるになむ、さまざまにかけとどめられて　（一五五－一三）

真木柱3例　あな聞きにくや。世に難つけられたまはぬ大臣を、口にまかせてなおとしめたまひそ。　（二二七－一〇）

梅枝　1例　兵部卿の宮わたりたまふ　（二六七－一〇）

藤裏葉2例　六位宿世　（三〇一－二）

若紫上16例　げにはた、人より異に、かくしも具したまへるありさまの、ことわりと見えたまへるこそめでたけれ。　（一一九－一三）

若紫下13例　斎宮におはしましししころほひの御罪軽むべからむ功徳のことを、かならずせさせたまへ。　（二一八－一〇）

柏木　5例　あはれ故殿の御けはひとこそ、うち忘れては思ひつれ　（三〇四－六）

横笛　2例　今めかしき御ありさまのほどにあくがれたまうて、夜深き御月めでに、格子も上げられたれば、例のもののけの入り来るなめり　（三三四－三）

夕霧　7例　一条の宮わたしたてまつりためへることと、かの大殿わたりなどに聞こゆる、いかなる御ことにかは　（七八－一二）

御法　1例　大人になりたまひなば、ここに住みたまひて、この対の前なる紅梅と桜とは、花のをりをりに、心とどめもて遊びたまへ。

（一一〇―七）

桐壺の巻から雲隠の巻までの漢語の使用例をまとめる。漢語使用と性差は次の結果となっている。

A男性→男性　402例
B男性→女性　397例
C女性→女性　91例
D女性→男性　118例

話し手の男性で漢語の使用が多い上位三人は左記の通りである。

光源氏　348例、夕霧　56例、内大臣　46例

これは話し手の男性が教養に優れた高位の人物であり、会話の相手が男性であれ女性であれ、漢語の使用が多いためであった。

話し手の女性で漢語の使用例が多いのは女房24例、乳母22例である。女房や乳母は役職名であるため、複数人が含まれている。そこで漢語の使用例が多い人物を見てみると左記になる。

大宮　15例、明石上　14例、一条御息所　12例、

聞き手の女性で多いのは左記である。

紫上　71例、玉鬘　32例、大宮　26例

聞き手で漢語の使用が多いのは上流階級の女性である。上流階級の女性には漢語の受容が進み、漢文漢語の世界を理解しているということであろう。

女性の話し手と聞き手の人物を比べてみると、聞き手の紫上や玉鬘などには漢語多いが、話し手の女房や乳母、大宮や一条御息所は少なかった。会話の受手の知識教養の表れが、漢語の多さに見られる。作者は、登場人物の知識教養の現われた言語環境を認識した物語づくりを行っている。この物語から当時の漢語受容の性差を今日の私たちは窺うことが出来る。

二、使用漢語の種類

使用漢語を分類し、男性と女性で漢語の種類にどう違いがあるのか。漢語の分類に当たり、峰岸明氏の分析を参考に[注4]、次の五つの分類とその他を設定した。

①仏教に関連する語
②人に関連する語（位階・官職に関する語、親族・身分・職業に関する語）
③文化に関連する語（建物・庭園に関する語、信仰・行事・進退・学芸・賞罰に関する語、調度に関する語）
④固有名

⑤一般言辞（体言、作用言、形状言）
⑥その他（植物、飲食、光彩など）

Ⅰ男性から男性への使用漢語

①仏教に関連する語…愛敬　阿闍梨　阿弥陀　海龍王　加持
吉祥天女　供養　結縁　極楽　護身　生　真言　宿世　世間
僧　僧都　精進　初夜　大徳　読経　入道　念仏　不動尊
坊　法師　法事　曼荼羅　老僧　律師

②人に関連する語…按察使　有職　院　右中弁　更衣　楽所
冠者　官爵　公卿　下臈　弘徽殿　権大納言　権中納言
妻子　式部　式部卿　侍従　上臈　主　四位　随身　受領
少将　少納言　少弐　先代王　大将　大臣　大納言　中宮
中将　中納言　帝王　春宮　内親王　判者　非参議　病者
弁官　内大臣　女御　女房　兵部卿　命婦　明王　衛門
揚名　王命婦

③文化に関連する語…宴　賀　曲　家損　格子　勘事　楽　学問
几帳　行幸　琴　願　碁　斎宮　斎院　作法　筝　障子
紙燭　消息　想夫恋　堂　致仕　厨子　帳　錠　調楽　調度
殿上　盤渉調　拍子　遺言　文才　文籍　柳花苑　和琴

④固有名…延喜　脚病　券　三史五経　三条　春秋　二条
白虹日　蓬莱　陽成院　六条　源少納言

⑤一般言辞…艶　勘当　警策　興　具　嫌疑　孝　考　後代
懸想　故　御覧　座　相　讒言　実　自然　邪気　上手
進退　次第　随分　修理　世界　奏　対面　天下　天地
道理　難　念　非常　便　不意　不定　不便　無礼　本意
法気　本性　無心　無徳　面目　用意　臨時　領　例　料
怨

⑥その他…三代　四代　十

最も多いのが人に関連する語の48語で、その中でも特に多く使用されていたのが「院」の23語である。人に関連する語に続いて多いのが一般言辞、文化に関連する語、仏教に関連する語である。

Ⅱ男性から女性への使用漢語

①仏教に関連する語…愛敬　阿闍梨　印　加持　袈裟　講説
後夜　生　修行者　宿世　修法　施入　僧　僧都　大乗
大徳　陀羅尼　長夜　道心　入道　念誦　不動　法師　法服
方便　菩薩　菩提　煩悩　目蓮　律師　六時

②人に関連する語…按察使　有職　院　右大将　右衛門　官爵
下臈　国王　故老　権大納言　権中納言　宰相　師　式部卿
侍従　随身　受領　少将　少弐　大学　大将　大納言　太政

大臣　中宮　中将　中納言　帝王　東宮　春宮　納言　女御
女房　女人　兵部卿　弁　本妻　類　六位　衛門

③文化に関連する語…賀　格子　勘事　学問　几帳　琴　願　験
元服　後宴　斎宮　斎院　筝　草子　曹司　想夫恋　試楽
紙燭　消息　寝殿　前栽　処分　対　堂　殿上　拍子　文字
遺言

④固有名…源氏　三条　淑景舎　春秋　青海波　二条　平中
本紀　六条　二三年

⑤一般言辞…按　案内　一向　艶　感　警策　具　懸想　掲焉
嫌疑　故　御覧　実法　執　情　正身　装束　執念　髄脳
奏　対面　追従　難　念　便なし　不意　不調　不用
本意　本性　無心　無徳　面目　用意　領　例　料　怨

⑥その他…紅葉

人に関連する語が最も多いのは前項と同様である。仏教に関連する語の方が多いのは、当時の女性の浄土思想が背景にあるものと見られる。文化に関連する漢語の女性への浸透の様子を見せている。

Ⅲ女性から女性への使用漢語

①仏教に関連する語…愛敬　宿世　法師

②人に関連する語…院　右近　更衣　冠者　在五中将　侍従
受領　少納言　大将　大臣　大納言　大弐　中将　女御
六位

③文化に関連する語…格子　几帳　願　草　障子　消息　宣旨
厨子　対　持　文字

④固有名…観世音寺　源氏　三条　二条

⑤一般言辞…案内　故　古代　御覧　随分　奏　対面　当国　徳
内外　念　便なし　本意　用意

⑥その他…なし

この項の漢語が少ないのは、如述の漢語使用の性差を表している。ここでも人に関連する語が最も多く、続いて一般言辞、文化に関連する語となるのは、女性の当時の宮廷での身分環境にて、政治の世界などから遠かったことの反映であろう。

Ⅳ女性から男性への使用漢語

①仏教に関連する語…愛敬　阿闍梨　阿弥陀　巻数　功徳　宿世
修法　僧　読経

②人に関連する語…院　豪家　左衛門　三位　少将　少納言
醍醐　大将　大納言　中宮　中将　中納言　女御　女房
兵部卿　別当大徳　民部　遺言　六位

③文化に関連する語…格子　勘事　琴　願　斎院　斎宮　消息
　柱　儺　服　梵字
④固有名…一条　宇津保　三条　妙法寺
⑤一般言辞…艶　具　故　御覧　実法　執念　草薬　雑事　執
　大事　対面　追従　調　便なし　風病　本意　本性　例　怨
⑥その他…紅梅　三年

最も多いのは同じく人に関連する語である。男性に対して使用されている語は仏教に関連する語である。女性同士の会話では3語のみであったが、男性相手では9語と増えている。対者の性差による使い分けのある事実は興味深いことである。

最も多く使用されている漢語は、男女差に関係なく②人に関連する語であった。宮廷の人間模様を描写する物語で、この種の漢語の使用が多いのは納得がゆく。①仏教に関連する語は、日本へ輸入された宗教関係語が、日本語へどう浸透していったかを伺うことのできるものである。男性が話し手の場合、聞き手が男性、女性を問わず仏教語は多かった。女性が話し手の場合、聞き手が女性の時は少ないが、男性の時は多っかた。宗教語の浸透がどう行われるのかを見せている。「愛敬」などは日常語がどう受容されてきたのか。漢語「愛」は、同義語の日本語「いつくしむ」とどう共存していたのか。日本語に入ってきた漢語の意義概念の変遷を考えると、漢語の受容は日本語にとって意義あるものであった。

三、女性が関与する漢語使用

女性の階級について渡辺英二氏[注5]、村山真紀氏を参考に[注6]、代表的な人物を左記のように設定した。

(1)特上流女性（藤壷、六条御息所、一条御息所、明石女御）
(2)上流女性　（紫上、弘徽殿大宮、玉鬘、女三宮、花散里）
(3)中流女性　（空蝉、明石上、末摘花、）
(4)下流女性　（靫負命婦、右近、女房、乳母）

Ⅰ漢語を使用している女性の階級差

話し手の人物が使用している漢語を示し、〈　〉に聞き手の人物を示す。また、○がついている人物は女性である。

(1)特上流女性
藤壷…院　僧　遺言　在五中将
　〈光源氏　東宮　○平内侍ら〉
六条御息所…大将　院　功徳　斎宮　執　修法　中宮　調　読経
　〈○女房　光源氏〉
一条御息所…院　宿世　対面　法師　遺言　用意

〈○落葉宮　夕霧　律師　○少将君〉

⑵上流女性

紫上…源氏　消息　便　宇津保　紅梅　少納言　儺　女御

〈○尼君　○中納言の乳母　○女房　光源氏　匂宮〉

大宮…宿世　故　御覧　左衛門　大将　柱　中将　怨

〈○宰相君　内大臣　夕霧　光源氏〉

花散里…一条　院　三条　大事

〈夕霧〉

弘徽殿…勘事　三年　追従　草　文字

〈帥宮ら　朱雀院　中納言〉

⑶中流女性

空蟬…持　中将　御覧

〈○軒端荻　○女房　光源氏〉

明石上…几帳　願　古代　御覧　厨子　女御　具　巻数　梵字

〈○明石尼君　○明石女御　光源氏〉

末摘花…格子　本意　阿闍梨　醍醐

〈○大輔命婦　○女房　光源氏〉

⑷下流女性

靫負命婦…奏

〈○更衣の母〉

右近…受領　中将　願　御覧　三位　執念　消息　本性

〈○三条　法師　光源氏〉

少納言…少納言　宿世　便

〈○紫上　惟光　光源氏〉

女房…愛敬　案内　院　冠者　故　御覧　宿世　受領　消息

宣旨　大将　二条　便　用意　艶　格子　少将　対面　兵部卿

例

〈○女房　○末摘花　○大宮　○紫上　○落葉宮　○少将君

○中宮　○朧月夜　光源氏　夕霧　供人〉

乳母…右近　御覧　宿世　大納言　対面　六位　阿弥陀　院

斎院　中納言　本意

〈○玉鬘　光源氏　大夫監　左中弁　○雲居雁　内大臣

○乳母　朱雀院〉

階級別に最も多い漢語の種類を見てみると左記のようになった。

特上流女性　仏教に関連する語

上流女性　人に関連する語

中流女性　文化に関連する語

下流女性　一般言辞

位の高い女性に多く仏教に関連する語が使用されていた。宿世を扱った物語で、仏教関連語は重要な役割を持って使用されてい

た。『源氏物語』の描写では、階層ごとに漢語が複雑な概念語から一般的な単純な語へと、移っていったことが見られる。下流の女性の女房や乳母の漢語使用から、当時の漢語浸透の様子を理解することができる。

Ⅱ男性から漢語を使用されている女性の階級差

(1)特上流女性

藤壺…紅葉　試楽　青海波　消息　奏　中宮　用意
〈帝　光源氏〉
六条御息所…院　故　御覧　斎院　本意　遺言　対面
〈光源氏〉
一条御息所…有職　一向　院　故　後夜　御覧　随身　修法
大将　大納言　長夜　二三年　女人　法師　本妻　六条
〈律師　夕霧　柏木〉
明石女御…愛敬　具　筝　大将　拍子
〈光源氏〉

(2)上流女性

紫上…案内　有職　院　格子　学問　袈裟　懸想　故　後宴
国王　斎院　筝　草子　装束　試楽　情　随脳　宿世　少将
消息　僧都　大将　対面　堂　中宮　中将　入道　女御　法服
兵部卿　便　平中　弁　本意　無徳　面目　文字　六条　怨
〈光源氏〉
大宮…有職　学問　官爵　元服　故　故老　御覧　宿世　消息
大学　対面　中将　追従　東宮　二三年　女御　便　不意
不調　本意　本性　六位
〈内大臣　光源氏　夕霧〉
弘徽殿…有職　右大将　斎宮　奏　大将　女御　本意　御覧
源氏　中将　女房
〈右大臣　朱雀院　内大臣〉
花散里…愛敬　院　嫌疑　故　正身　前栽　対面　中将　兵部卿
遺言　用意
〈光源氏　夕霧〉
女三宮…対　按　院　加持　琴　験　御覧　筝　淑景舎　宿世
消息　大将　対面　中宮　女御　念踊　不用　本意　用意　例
〈光源氏　柏木　朱雀院〉
玉鬘…案内　夕食　几帳　下臈　御覧　想夫恋　侍従　実法
少将　消息　大正　対面　中将　中納言　二条　女房　拍子
方便　本意　菩提　本紀　煩悩　無心　領
〈柏木　光源氏　夕霧〉

(3)中流女性

明石上…有職　琴　懸想　掲焉　故　斎宮　執　宿世　受領
消息　太政大臣　便　本意　遺言　六時
〈光源氏　明石入道　相人〉
末摘花…権大納言　春秋　本意　菩薩　遺言
〈禅師の君　光源氏　光源氏　禅師の君　侍従〉
(4)下流女性
靫負命婦…故　消息　奏　大納言　念ず　本意　遺言
〈光源氏　桐壷帝〉
右近…下臈　紙燭　修業者　大将　中将　難　二条　便
〈光源氏〉
乳母…院　右衛門　具　願　故　権中納言　式部卿　宿世　少弐
大願　対面　中宮　女御　念ず　類　六条
〈左中弁　朱雀院　豊後介　大夫監　老人　光源氏〉
女房…愛敬　格子　講説　宰相　曹司　宿世　消息　大将　帝王
殿上　納言　二条　女房　本意
〈朱雀院　光源氏　兵部卿宮　夕霧　左大臣〉

男性の発する漢語は、特上流から中流女性まで多い。漢語受容の多い男性が、女性の階層を問わず漢語を使用しているのは、当時の漢語の浸透の様子を示している。宮廷外の庶民層への浸透の様子は彼らの書いた文書が残っていない。

上流女性である紫上は、光源氏からしか漢語を使用されていない。玉鬘は、話し手としては漢語を使用していなかったが、聞き手としては24語も漢語を受けている。上流女性の多くは、身近な人物からの漢語使用がほとんどであった。宮中での人間関係によってのみ言語生活が成り立つ当時の様子を反映している。

下流の女性が受ける漢語は少なく、人に関連する語がほとんどである。男性は会話の受け手によって語を選んでいる。

前項のI漢語を使用している女性と比較して、男性が使用している漢語の方が多くなっているのは、女性は漢語を修得理解していても、使用することを控えるという、漢語忌避の様相が『源氏物語』で確認できるのである。作者紫式部は、王朝時代の漢語受容の様子を男女差や階層差で書き分けて描写している。

まとめ

『源氏物語』の会話文の漢語を通して、当時の日本語への外来語である漢語の受容の実態に迫っていきたいと思った。日本では仏典や漢籍が輸入され、多くの漢語が輸入された。僧や学者による典籍で知る漢語は、当時の言語生活を反映したものとは程遠いと思われる。日常生活の言語生活に受容された漢語を知るには『源氏物語』の会話文を観察するのが良い方法だと考えた。会話文

は地の文に比べより言語生活の姿が反映しているはずである。古文の会話文は、忠実な発話の記録ではないことを認識しているが、単なる量的な把握ではなく、発話者の性差である男女差と女性差や、そして発話者の社会的階級差による、漢語の受容差を見ようとした。

漢語を採録して、使用漢語の約六割に女性が関わっており、女性が話し手である場合も約二割になるという結果を得た。

女性が話し手である場合と聞き手である場合を階級別に分けてみると、上流女性では、話し手の場合よりも聞き手の場合の漢語使用の方が多く、特に大きな差が表れた。また、男性が話し手で特上流から中流女性までが聞き手の場合、様々な漢語の種類が使用されているが、下流女性ではそのほとんどが人に関連する語であった。そして、使用されている漢語の種類で特徴的な使用差が見られたのが仏教に関する語であった。

今回、女房や乳母などの女性も漢語の使用率が高かったことを見ることができた。作者である紫式部や清少納言は漢文漢語の世界を十分修得し理解している女性である。宮中には高い教養を持つ女性たちが多く、女房の世界では漢文漢語の知識があり、言葉を選びながら会話をしている様子が窺えた。物語の世界で登場人物を書き分けながら、漢語も書き分けていたのが紫式部であった。平安時代という身分社会の知識人層は、外来語を多く受容している。作者は登場人物に漢語を使用させることで、実は自己の外国語の修得力が表れているのである。機会があれば漢語使用の実態を再調査したい。

注

注1　浅野敏彦「平安時代の漢語語彙について」（『同志社国文学』同志社大学国文学会、一九七八年）

注2　青表紙本系統中の善本とされる、平安博物館所蔵の、大島雅太郎氏旧蔵本を底本とする『源氏物語（一）～（六）』新潮日本古典集成（新潮社、一九七六年～一九八六年）

注3　『新潮国語辞典　第二版』（新潮社二〇〇〇年）本辞典は、漢語・和語は見出し語にその区別をしている。

注4　峰岸明「源氏物語の漢語」（『源氏物語講座第六巻』勉誠社、一九九二年）

注5　渡辺英二「謙譲語の敬意表現―源氏物語・会話文の敬語」（『国語国文研究』五二号北海道大学国文会、一九七四年）

注6　村山真紀「源氏物語の文体の研究―会話文の文末部に着目して―」（東京女子大学日本文学科一九九七年卒業論文）

（よこまつ　なつみ　二〇一七年日文卒）